

2024年3月17日

説教題「世の光、イエス」ヨハネ福音書 11 章 1～11 節

主任牧師 加藤 誠

「昼間は十二時間あるではないか。昼のうちに歩けば、つまづくことはない。この世の光を見ているからだ。しかし、夜歩けば、つまづく。その人のうちに光がないからである。」(ヨハネによる福音書11章9-10節)

福音書には、主イエスが死んだ人間をよみがえらせる場面がいくつか出てきます。「指導者（ヤイロ）の娘」（マタイ 9 章、マルコ 5 章）、「やもめの一人息子」（ルカ 7 章）、そして「ラザロ」（ヨハネ 11 章）です。その中で「ラザロの復活」はひと際大きな衝撃を人々に与えました。というのは、他の二つの場合は、死後それほど時間が経っていたわけではなかったために、実は「眠っている」状態から「蘇生した」と受け取ることも出来た事件だったのに対して、ラザロの場合は死後四日も経っていて、墓の中で「もう臭っています」という状態からの復活だったからです。

人々はこの主イエスの偉大な奇跡を目の当たりにして大いに驚き、熱狂します。ラザロの復活はベタニヤ村というエルサレムからわずか 3 キロほどの近くで起こった事件でしたから、その噂はすぐに都エルサレムに住む人々にも伝わってそこでも熱狂が起きました。そのためユダヤ教の指導者たちが集まり、このイエスをこのまま放置しておくわけにはいかないとその殺害の相談を始めています。そう言う意味では、主イエスを十字架に追いやる「引き金」となった事件でもあったのでした。

ただヨハネ福音書は、この事件を「イエスは偉大な奇跡をおこなうメシアである」という称賛で終わらせずに、「イエスはどのようなメシアであるのか」を丁寧に語っています。

一つは「主イエスは、人の願いを叶えるメシアではなく、神の栄光に仕えるメシアである」ということです。ラザロの姉妹であるマルタとマリアは、ラザロが重篤な状態になったので、主イエスのもとに使いを送ります。「あなたの愛する者が病気です」と。「来てください」とは言っていないが、その心の中では「主イエスが来てくださったならどんなに心強いかな」と強く思っていたはずです。そこには二人のギリギリの葛藤があったことが推測されます。実はこの直前に、主イエスはエルサレムの都でユダヤ教の指導者たちから石で打ち殺されそうになっています。それでヨルダン川の向こう側に身を避けられた。その主イエスに「ベタニヤに来てください」と言うことは、再び主イエスを危険な目に遭わせることになってしまう。なので、彼女たちは「来てください」とは大っぴらに言えなかったのです。しかし、主イエスがベタニヤにずいぶん時間が経ってから到着した時に、マルタとマリアの二人ともが「主よ、もしここにいてくださいましたら、わたしの兄弟は死ななかつたでしょうに」と同じ言葉を口にしていますから実は彼女たちは心の底では主イエスに来てほしかったのです。

一方、主イエスは、マルタとマリアがわざわざ使いをよこしたことで、彼女たちが「来て欲しい」と願っていることは重々承知のことでした。しかし主イエスはそれを聞いても、なお二日間そこに居たと聖書は書いています。そして二日経ってから「もう一度、ユダヤに行こう（つまりラザロのもとに）」と言い出したのでした。これだけ見ると、主イエスはたった二日間で気が変わったのかな…と思うわけですが、主イエスは「神が明確に自分に示されること」を待っていたのでした。愛する人の言葉だから動くのではなく、ただ神の示しに従う。それはカナの婚宴の時（2章）でも母マリアの要請にすぐに答えられなかったこととも重なりますが、主イエスという方は「人々の願いを叶えるメシアではなく、神の栄光のために仕えるメシアであること」がここに示されていくのです。

もう一つは「主イエスは、人間の闇を照らす、世の光として来られたメシア」ということです。主イエスが神の子の栄光をあらわせばあらわすほど、指導者たちはイエスを憎み、敵対心を募らせていきます。彼らはイエスのことを「悪霊に取りつかれている！」と非難して排除しようとし、彼らは「自分たちは律法を守っている光の子である」と胸を張っていましたが、実は彼らこそ闇の子であることが主イエスによってあぶりだされてしまったのでした。9節の主イエスの言葉は不思議な言葉ですが、意味はシンプルです。「自分の闇に気づき、光であるイエスを受け入れる者は『つまづく』ことがないが、自分の闇を認めず、光であるイエスを拒否する人は光をもつことができないので『つまづく』ということ」です。

しかし主イエスは、そのようにして表面上は光の子であることを装いながら、実はそのうちに深い闇を抱え、「墓の中に横たわり、死んだ者」「もう臭くなっている者」を墓の中から呼び出し、神の命の向かって「生きる者」とするために来てくださいました。ヨハネ5章25節「死んだ者たちが神の声を聞く時が来る。今やその時である」という御言葉の通りに。この「もう臭くなっている者」とは誰のことでしょうか。わたしは以前いた教会で、長い間教会を忠実に一生懸命に担って来た方が「この『もう臭くなっている者』とは私のことだと知らされて、自分の信仰は粉々にされた…」と語られたのと聞いて、胸を衝かれたことがあります。墓の前に立ち「ラザロ、出てきなさい」と大声で叫ばれた主イエスは、実は私たち一人に今日「死んだ者よ、その墓の中から出てきなさい」と語りかけられているのです。

今朝、私たちの抱える闇の中に、世の光として来てくださった主イエスの語りかけに私はどのように応答していきますか。「わたしは世の光である。わたしに従う者は暗闇の中を歩まず、命の光を持つ」（8：12）。この方の光を受け入れ、神の命に向かう歩みを始めていきましょう。